

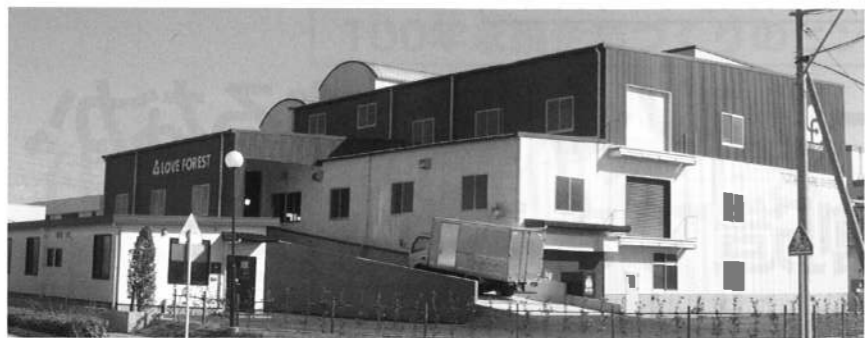
福岡の中小企業応援マガジン

Business **B**is  **N**avigator **N**avi

2011
September
Vol.03

9





大牟田市にある使用済み紙おむつのリサイクルプラント。1日に20トンの処理能力を持つ。

ました。来年には小型プラントが完成する予定です。必要な特許も取得しています。

自治体の規模に合ったプラントを提供

—どのくらいの処理能力がありますか。

長 一日五トンの処理能力があります。このプラントの特徴は、ライン方式で、処理量に応じて

増設することができます。というところから、小型でもあることから、価格も安くご提供できるようにいたします。

このプラントが製品化できれば、自治体の要望に応じたプラントを提供できるようになります。そうなれば、予算的な問題で導入を躊躇しなければならなかった多くの自治体が、導入に踏み切れるようになると思います。

—使用済み紙おむつのリサイクルシステムが様々な自治体で普及することで、今後はどのような影響が見込まれますか。

長 日本は今、高齢者世帯が四割近くを占めています。言い換えれば、自治体の中の半分がこういう人達です。しかも、お互いに交流がなく孤立している。孤独死を含めたいろんな問題が起きるようになります。そこで、民間企業とタイアップして安否確認ができる仕組みが必要になります。

今回の大牟田のような仕組みが自治体単位でできると、安否確認もできるようになります。また、新しい物流も生まれます。そして、この物流の仕組みの中で高齢者の雇用も生まれるようになるでしょう。

—元気な高齢者が多いですし、これからは定年の年齢も上がる

時代になります。介護だけでなく、元気な高齢者ケアの仕組みもさらに必要になるのではないのでしょうか。

長 高齢者もおむつが必要な人、デイサービスに通う人と通わない人、元気な人などいろんな層があります。そうすると、例えば、デイサービスに通う前の元気な人は、お茶を飲みながら会話ができたり、人との接触ができるコミュニティセンターに入出入りできる仕組みを作る。これは自治体に空き家をコミュニティセンターとして開放してもらえば可能になります。

屋外コミュニティで休耕地や休耕地を自治体に開放してもいい、野菜や果物を作り、季節毎に品評会を開催する。品評会で優勝したら地域の特産品として売り出すなどの競争原理を取り入れてもいいでしょう。そうすることで、高齢者は家から出てきます。元気な町づくりにもつながるでしょう。

このような仕組みづくりには、大きな予算は必要ありません。

医療から福祉までのトータルな連携が必要

—医療、福祉業界においては、

どのような仕組みづくりが必要だと考えていますか。

長 介護・福祉分野は民間でも参入できるようになり、環境が変わりました。その中で、私が危惧しているのは、高齢者がビジネスの道具になってしまう可能性があるということです。

今、医療福祉の問題で国に予算が無いという理由から、病院等に入院した患者さんを短期で退院させるようになりました。ところが、退院するときは、次に受け入れてくれるところを自分や家族が探さなければならぬという現実があります。

ですから、本人や家族が探しに行かなくても、退院させる側と受け入れる側がきちんと連携できるような地域医療の仕組みを作る必要があると思っています。

急性期から始まって、次にどの機関に引き継げるのかを医療から福祉までトータルで連携できる仕組みです。

この流れを出す側、受ける側、本人の三者の中で作っていきます。そうすれば共通カルテができます。今、それがうまく連携できていないので、ある程度が回復してしまってもまた機能低下を起こしてしまうという問題を抱えています。

医療から福祉までの、その人

企業概要	
会社名	トータルケア・システム株式会社
住所	福岡市博多区博多駅東3-9-26 092-433-1033
設立	平成13年11月14日
資本金	1億1,700万円
事業内容	使用済み紙おむつの水溶化処理、再生パルプ等の販売、紙おむつリサイクル事業の総合プロデュース
URL	http://www.totalcare-system.co.jp



紙おむつのリサイクルシステムで新たな仕組みを構築する

トータルケア・システム株式会社

高齢社会における日本では今後、使用済み紙おむつの処理が社会問題となりそう。紙おむつのリサイクルシステムを開発したトータルケア・システムは、自治体と連携し、自治体による全国で初めての紙おむつのリサイクルシステムを構築し注目を集めている。

全国で初めて自治体が紙おむつをリサイクル

—福岡県、大牟田と連携して紙おむつのリサイクルを10月から始めるそうですね。

長 家庭から出る使用済み紙おむつのリサイクルをスタートします。この仕組みは、福岡県と大牟田、当社による共同プロジェクトという形で2008年から始まったものです。家庭から出る紙おむつを自治体でリサイクルする仕組みは全国でも初となる取り組みです。

—どのような仕組みでリサイクルするのですか。

長 大牟田にある60ヶ所のコミュニティセンターに紙おむつの回収ボックスを設置します。住民の方には、一袋一五円のゴミ袋に使用済み紙おむつを入れ、回収ボックスに出していただきます。それを週に一回、二回の割合で回収します。使用済み紙おむつは二四時間、いつでも

回収した紙おむつは何に利用するのですか。

長 今は、建設資材などへリサイクルしていますが、将来的には再生パルプを原料とした紙おむつを再生産することを目標としています。いわゆる「紙おむつから紙おむつをつくる」ということです。技術的な課題はありますが、解決のめどは付いています。

も出すことができます。

—そうして回収した紙おむつを大牟田で稼働している当社のリサイクルプラントに持ち込みパルプとポリマー、ビニールに分離し、再生します。

—いつでも出せるというのは、住民にとってはありがたい仕組みですね。

長 出す側の立場に立てば、プライバシーなどへの配慮も必要だと思っています。

紙おむつから紙おむつをつくる

—回収した紙おむつは何に利用するのですか。

長 高齢者もおむつが必要な人、デイサービスに通う人と通わない人、元気な人などいろんな層があります。そうすると、例えば、デイサービスに通う前の元気な人は、お茶を飲みながら会話ができたり、人との接触ができるコミュニティセンターに入出入りできる仕組みを作る。これは自治体に空き家をコミュニティセンターとして開放してもらえば可能になります。



長 武志 社長

Profile

1945年4月1日生まれ、福岡県出身。福岡大学商学部卒。趣味はゴルフ。

—使用済み紙おむつの処理需要は今後益々高まると見込まれています。その中で、焼却や埋め立てといった従来の処理方法ではなく、リサイクルできるといふ長社長が開発されたシステムに対する関心は高いのではありませんか。

長 大牟田のプラントには、自治体関係者と政治家の方がよく視察に来られていましたが、ここところ、大牟田とのセットで視察に来られるケースが増えました。皆さん、かなり関心が高いと感じています。

すでに、大牟田の他にも導入を検討されている自治体も幾つかあります。

—紙おむつのリサイクルシステムを導入したい自治体は、今後増えてくると思いますが、

—ラントとなると大きな投資となりますね。

長 確かにコストの問題はあります。自治体の大半は、人口一〇万人以下規模です。そうした自治体から出る使用済み紙おむつは、一日に五トン以下のところが多く、大型のプラントは必要ありません。

—経営的に見れば大型の施設の方が効率はいいわけですが、ごみ行政の立場から見ると、自治体単位で産業廃棄物は越境して持ち込めませんが、一般廃棄物は越境できないという事情がありますから、自治体の規模に合わせたプラントと仕組みを提供することが必要です。

—そこで、もつと小型で低価格なプラントの開発が必要になると考え、独自に開発を進めてき